
帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

・名称「帰国渡日児童生徒つながる会」

・目的

現在、京都府の学校には、国際結婚の家庭に生まれた子どもや、在日外国人、帰国児童生徒などさまざまな形で「外国につながる児童生徒」たちが点在している。そのような生徒たちは、言葉や文化が違うということから、他の日本人の生徒たちとのコミュニケーションが上手くいかず、クラスで孤立してしまうことも多いようである。そのような生徒たちは、普段お互いに出会う機会を持つことが少ない。そのため、共に出会い、活動することを通して、同じようなことに悩んでいる人がいるのだということを知り、そんな悩みを分かち合える友達を得ることができること、また、一人一人が持つ個性を尊重し、自分自身や自分のルーツに自信を持ち、彼ら自身はその国の言語や文化を大切にできるような場を提供することを目的として、2008年度よりe-projectを利用し活動を続けている。

つながる会の活動は主に一年を通して春と夏と冬の3回、各1～2日間行っており、それに向けて週一回ミーティングを行っている。つながる会の活動をより多くの外国につながる子どもたちに知ってもらうため、活動日の1カ月前にはチラシと申し込み用紙を作成し、京都市立小学校、中学校については、教育委員会にご協力いただき、一斉送信メールで各学校宛にチラシを送付してもらっている。えて、フィリピン人団体パグアサと合同で、子どもたちの勉強を支援するたけのこ会も、毎月第2日曜日に行っている。本活動への参加者は長い間日本に住んでいる、あるいは生まれ育ったという子どもから、渡日して間もない子どもまで様々である。そのため日本語がそれほど得意でない子どももいるが、日本語と

ルーツの言葉を両方共話す事が出来る子どもやつながる会のスタッフの力を借りて、コミュニケーションをとりながら活動をしている。

2. 代表者および構成員

・代表者

青木小百合 国語領域専攻 4回生

・構成員

島涼也 英語領域専攻 3回生

井澤七海 社会領域専攻 3回生

坂本歩美 美術領域専攻 1回生

小栗沙和子 理科領域専攻 1回生

山川ゆうり 数学領域専攻 1回生

芝崎よしの 英語領域専攻 1回生

北角美乃 発達障害教育専攻 1回生

森口菜美 連合教職実践研究科 M1

3. 助言教員

浜田 麻里先生 (国文学科)

第2章 内容や実施経過など

1. 春の活動について

新型コロナウイルスの影響により中止とした。

2. 夏の活動について

直前まで準備を進めていたが、新型コロナウイルスの影響により中止とした。以下に準備の過程を示す。

6月 活動内容の考案 新活動員の勧誘

7月 チラシ作成・印刷・発送

8月 緊急事態宣言発令により中止

3. 冬の活動について

以下のスケジュールで準備を進め、無事に開催する事が出来た。

10月 活動内容の考案

11月 チラシ作成・印刷・発送

12月28日 事前ミーティング

1月5日 冬の活動開催

13:00～

自己紹介 (名前,学年,自分のルーツ,好きな動物)

勉強会

14:30～

福笑い

しっぽ取り@D棟前

16:00～

アンケート記入

16:30～ 解散

感染症拡大防止のため昼食を終えてからの参加にするため、午後からの開催とした。

勉強会では各々が冬休みの宿題等を持ち寄り活動を行った。スタッフは机間巡視をしながら適宜サポートを行った。勉強会後はお正月にちなみ福笑いをを行った。それぞれが思い思いに顔を描き、切り取った後目隠しをして並び替えを行った。並び替え後はそのままテープやのりで固定して希望者には持って帰らせた。その後はしっぽ取りを行い、個人戦やチーム戦で競わせた。初参加の児童生徒が今回多かったが、最初に緊張している様子であった児童生徒が最後には打ち解けて帰っていた。

4. たけのこ会について

今年度、日程や人員が合わずつながる会として活動への参加は出来ていない。

第3章 結果や成果など

今回は初参加の子ども達が多数いた。最初は緊張して中々部屋に入る事が出来なかった子ども達も、最終的には笑顔で帰っていった。また、学校にいけないあるいは学校で嫌な思いをしている子ども達も、本活動に居場所を見出している様子が見られる。普段参加児童生徒を学校で気にかけている先生方や、付き添いの保護者の方は安心した様子で帰られた。本活動の意義の1つである「共に出会い、活動することを通して、同じようなことに悩んでいる人がいるのだということを知り、そんな悩みを分かち合える友達を得ることができること」の達成が出来たと思える1年であった。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. まとめと反省

今年度は1回生が多く活動に興味を示して参加してくれており、前年度の勧誘0人の危機を脱している。しかし、若干の人員不足である事は否めないため、今後も人員の勧誘が課題の一つにある。

また、やむを得ないことではあるが感染症による度重なる活動中止が心苦しい。活動後のアンケートでは中国ルーツの子どもたちから「次の活動ではみんなで餃子を作りたい」という声も聞こえている。早くコロナウイルスの影響が少なくなりいつも通り活動が出来る日を待ち望んでいる。

レクリエーションに関しては、既に仲のいい人たちでチームを組んでしまい、他との交流の仲が広がらないという難点があった。

たけのこ会については、新型コロナウイルスの影響により活動内容が変則的であったこと、つながる会の人員が1回生がほとんどであり不慣れであった事から活動に参加出来ていない。1回生は冬の活動に参加してくれた為、そこからたけのこ会の活動につなげていく所存である。

2. 今後の展望

毎回の活動では保護者の方や教育関係者等、多くの見学者の方がいらっしゃっている状況である。特に保護者の方は子どもが心配で見学にいらっしゃる方が多いため、保護者の方にも「活動に来てよかった」と思ってもらえるような活動を心がけていきたいと思う。先にも述べたが子どもたちの中である程度グループが出来てしまっている印象はある。その為、レクリエーションのグループ分けであえて別のグループにするなどして、子どもが自身と同じように外国にルーツを持つ子どもたちと交流し、輪を広げていける状況を作っていきたい。